地域政策学ジャーナル
2023，第12巻(通巻第18号)，1-3

［巻頭言］

新井野洋一教授，印南敏秀教授の退職記念号に寄せて

阿部　聖（地域政策学部長）

Preface to the Retirement Commemorative Issue of Professor Yoichi Niino and Professor Toshihide Innami

Sei Abe

はじめに

新井野洋一先生と印南敏秀先生が2022年度末で本学を定年退職されることになる。新井野先生は，山形県新庄市のご出身で，順天堂大学大学院（健康管理学専攻）をへて1978年４月に愛知大学教養部講師（体育実技，保険衛生）として赴任された。1998年４月には教養部解体にともない経済学部に移籍ののち，2011年４月には新設された地域政策学部教授として現在に至っている。愛知大学に赴任して45年間という長きにわたり本学の教育・研究・大学運営等にご尽力いただいた。とくに新井野先生は，2009年に設けられた地域政策学部設置委員会では，副委員長として中心的な役割を果たされ，2012～2013年度，地域政策学センター長，2013～2016年度には地域政策学部長として活躍された。

印南敏秀先生は，愛媛県新居浜市のご出身で，武蔵野美術大学（造形学部絵画科），日本近畿ツーリスト日本観光文化研究所をへて，1989年４月に愛知大学教養部助教授（文化人類学，民俗学）として赴任された。1998年４月に経済学部へ移籍ののち，2011年４月に地域政策学部教授として現在に至っている。印南先生も34年間にという長きにわたって本学の教育・研究，学芸員及び社会教育主事，一般教育研究室等の運営にご尽力いただいた。

以下，新井野先生と印南先生の愛知大学在籍中の研究活動，教育活動，社会貢献活動について簡単に紹介したい。

教育活動

新井野先生の本学部での担当科目は，「少子高齢社会論」「スポーツ政策論」「健康・スポーツ政策論」「スポーツクラブ運営論」「スポーツ文化論」のほか「スポーツ健康演習」「スポーツ実技」など幅広い。このうち「スポーツ文化論」のシラバスをのぞいてみると，社会・文化現象としてのスポーツから始まって，現代スポーツの特質，オリンピックの歴史と諸問題，高齢化とスポーツ，スポーツの社会病理，スポーツとジェンダー等々とつづく。スポーツを通じた日本社会論，日本文化論と言ってよいだろう。

ゼミナールでは，２，３年次で「地域における健康づくりとスポーツ振興の政策課題の研究」を，４年次では「地域における健康づくりとスポーツ振興の政策課題の整理と提言」をテーマにして卒業研究へ繋げている。いずれにおいても，スポーツをめぐる社会病理（体罰，ハラスメント，事故，犯罪など）について多くの時間を割いておられる。

また，課外活動においても愛大野球部部長（2007～2012年度），愛大ハンドボール部部長兼監督（2008～2022年）などを努め，多くのスポーツ学生に接してこられたと言えるだろう。

印南先生の本学部での担当科目は，「文化人類学」「民俗学」「地域の食文化」「食具論」「博物館概論」などである。シラバスをのぞくと，「文化人類学」では自然と人との関わりについて「住まい」を，「民俗学」では食文化をテーマに授業が構成されてい

る。とくに「民俗学」では食文化とその背景のあとで，「日本人は何をどう食べてきたか」「なぜ，パン，御飯，麺なのか」「なぜ，人は酩酊するのか」「ご飯をフィールドワークする」「台所を探検する」などのテーマが並んでいて興味深い。これらは「地域の食文化」や「食具論」へとつながり，日本人の食生活の文化と歴史，その特徴，フィールドワークの基本を学ぶ構成になっていると言える。

ゼミナールでは，「東海地域の生活文化」をテーマにしており，フィールドワークや実習を重ねながら，卒業研究のテーマを探すとしている。ゼミの活動として２年次は「ハゼ釣りに行って焼きハゼをつくる」，３年次は「アサリ採りと串あさりをつくるのを記録する」ともうたっている。

また先生は，既述のように学芸員及び社会教育主事課程委員会の委員や委員長（2008～2009年度）として，愛知大学から多くの学芸員や社会教育主事を生み出すことに尽力されてこられた。

研究活動

新井野先生の研究分野は，「保健社会学」「スポーツ社会学」である。業績としては『現代社会の保健福祉』（川島書店，共著），『保健社会学』（垣内書店，共著），『生涯学習のすすめ』（青山社）などの著書をはじめとして論文数も数多い。先生の業績を拝見すると，保健社会学，スポーツ社会学をベースとしてスポーツ文化論，スポーツ政策論，スポーツマネジメント，少子高齢化論，スポーツ実技に関するものなど，実に幅広い。これは45年間という長い大学教員生活や豊富な社会活動を背景としたものであると考えることができる。

先生が地域政策学部の創設に中心的役割を果たされたことは，記述のとおりであるが，2011年以降は，地域政策学やスポーツと地域活性化，新型コロナに関するご意見を披露される機会が多くなったように思われる。地域政策学については「地域政策学ジャーナル創刊にあたって」をはじめ，「地域活性化を目指すスポーツ事業の課題と展望」，「地域政策学の可能性」（いずれも『地域政策学ジャーナル』）などがある。

印南先生の研究分野は，「民俗学」である。業績は『京文化と生活技術』（慶友社），『水の生活史』（愛知大学文学会叢書），『里海の生活誌』（みずのわ出版），『共同浴の世界』（総合郷土研究所）などの著書はじめ論文数も数多い。聞くところによれば，山口県周防大島出身で，武蔵野美術大学教授であった宮本常一先生（民俗学・農政学）のお弟子さんであるという。先生の研究は，瀬戸内沿岸をフィールドとしてはじまった。1980年代前半には『金毘羅庶民信仰資料集』（全３巻）などの業績をものしている。その後，職場を京都に移し，京都山城を中心とした地域にフィールドを広げて調査活動を行い，さらに愛知大学赴任後は，日本の代表的な内海である瀬戸内海および三河湾における里海の生活・文化・技術などについて調査・研究を深めてきた。こうした関心の背景には，かつては豊かだった里山や里海で暮らす人々への思いと，里山や里海の持続性に対する危機感があると言えるだろう。とりわけ里海についての最近の論文には「タイと儀礼食文化」（『瀬戸内海』，2019）「魚食文化と里海物語」（『沿岸域学会誌』，2020）などもある。

なお先生は，学内では愛知大学総合郷土研究所や中部地方産業研究所の所員として研究活動を行ってきた。郷土研では所長（2011～2013年度）も務められた。

社会貢献活動

新井野先生は社会貢献活動も活発に行ってきた。まず，大学野球との関連では，愛知大学野球連盟理事（2010～20年），全日本大学野球連盟理事（2018年～現在），日本学生野球協会理事（2019年～現在），全日本大学野球連盟副会長（2022年～）と，愛知県および日本の大学野球の発展に貢献されてこられた。

学会との関連では，体罰・暴力根絶特別委員会委員（2014～15年），日本体育学会体育社会学専門分科会監事（2015～21年），日本スポーツ産業学会運営委員（2013年～）などの委員を歴任してきた。

行政との関連では，豊橋市健康なまちづくり協議会委員としての活動や「スポーツを活用したまちづ

くりのあり方と行政の役割」（東海都市連携協議会）など数々の講演活動などを積極的に行っている。

印南先生は，研究分野との関連で各市行政の文化財保護審議会や博物館資料関連の社会活動が多い。豊橋市文化財保護審議会（～現在），豊橋市二川宿本陣資料館専門委員（～現在）はじめ，委員の範囲は香川県，愛知県，静岡県，奈良県，四日市などにおよんでいる。また，愛知県史調査執筆委員としてもご活躍された。

学会関係では，日本生活学会，日本民俗学会，日本食具学会などに所属され，日本生活学会では理事としてのご経験もある。

講演活動も「三河湾の里海」（三河コンソーシアムシンポジウム，2018），「宮本常一と生活文化の伝承」（山城郷土資料館，2020）をはじめ数多い。

おわりに

私事で恐縮であるが，私が愛知大学経済学部に赴任したのは2001年のことであった。新井野先生も印南先生もすでに経済学部に在籍しておられた。教育・研究だけでなく大学運営にも積極的に参加しておられた新井野先生と，そう言っては語弊があるかもしれないが，大学運営には関心がなく，フィールド調査に明け暮れているように見えた印南先生といった感じで，両先生とも，大変個性が強い方だなという印象があった。その後，両先生も私も地域政策学部にそろって移籍した。通算，23年間，職場を同じくしてきたわけである。新井野先生については，地域政策学部創設のご尽力はじめ，その行動力に驚嘆している。印南先生には，その飄々とした感じからは想像できないような研究への熱意というものを感じている。

長くなってしまったが，以上で新井野先生と印南先生のご退職記念号に寄せた前置きとしたい。大学教員生活のほんとうの終わりの始まりの時期として，あと２年間（退職後の非常勤期間）で大学生活の整理を行うことになる。そして，大学という組織からは解放された新たな自由な時間を得るというわけである。両先生の今後のご健康と，研究上のご活躍を心よりお祈りする。